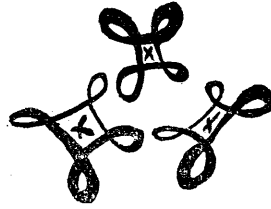


# 遠 足 事 件

— ようちえん時代のおもいで —

柴 田 南 雄



「母校のお茶の水大で音楽理論を教えている」というと大ていの友人は「ザケタロヲ利キナサンナ」といった顔をします。そりやもちろん女高師そのものが僕の母校であり得よう筈はありません。実はその附屬も附屬の幼稚園が小生の母校という訳なのであります。

ほんとうのお茶の水時代でした。また近代的なコンクリート橋にかけ替る前の、鉄骨と木材が無器用に組み合されたお茶の水橋だったと覚えています。関東大震災の直前の頃でした。(もんだつぷり三昔になります)そして今、はいしやの大学になっていて、いかに明治大正風の学舎が散在していて、幼稚園はその一ばん奥の隅、塀一つで湯島の電車道でした。幼稚園といえば、まず思い出すのが藤棚、桐の実、砂場、ベツタンコと穴アキ(これは砂場用原始的オモチヤの名称)粘土細工、それから一日中(ハバカリへの往復さえも)そのリズムで跳び廻っていたスキップ、滝廉太郎の「幼稚園唱歌」などです。——もともと、「水あそび」「夕立」など幼稚園で教わった唱歌のほとんどが滝廉太郎の作で、それらが明治三十四年だかにお茶の水幼稚園の依頼で作曲されて以来、僕たちの時

まで二十年もの間一貫して使われていたのだという事実を知ったのはずっと後のことでした。

園長(主事と申し上げるのでしょうか)は申すまでもなく倉橋先生でした。所が、僕は何だか申し訳ない気がするのですが当時の先生のお姿もお声もどうしても思い出すことが出来ません。それは、先生が御自身で園児たちに接する機会がそれ程多くなかったからなのかも知れませんし、また、幼稚園の園長先生とか、小学校の校長先生とかは、童心にあって多少ともコワイ人、威厳のシンボルとして印象づけられるのが普通であるのに、倉橋先生の温容は僕たちにそういう作用を少しも及ぼさなかつたからなのかも知れません。多分その後の方ではないでしょうか。とにかく僕たち「森の組」の担任としてお世話になったお優しい崎山先生はもちろんの事他の組の受持であられた及川先生や番内先生のお姿も今でも幼稚園全体の雰囲気と共になつかしく想い出されるのですが、園長先生の印象だけはポツカリ穴があいた様に何一つ残っていないのは実に不思議といえば不思議なことです。

友だちの印象も割合に薄い、ということはおそらく僕が一人つ子でいわゆる社交性に欠けていた精でしょう。名前と顔をともかくも思い出せるのが男の子に二人、女の子に三人いるきりです。スガワラサミ君——カタカナで書かないと感じが出ません——には多分幼稚園以来一べんも会っていないのに、彼の事は何となくよく覚えています。ある時何先生だったかが、「スガワラさんの機関車は、いつも止まっている所をキチンと画いてあるけれど、シバタさんは全速力で煙を吐いて走っている所ばかり画くのネ」といわれ、それが妙に子供心に気にかかったのですが、今日スガワラ君がすぐれた数学者になられ、小生が音楽を職業とするようになったその「三つ児の魂」を当時、早くも先生に見抜かれていたような気がしてなりません。

僕の幼稚園生活のクライマックスは何といっても「遠足事件」で、及川先生もそれが出るのをチャンと計算に入れて、僕にこの原稿をお命じになったにちがいないので、冷汗をふきふきその想い出話しで残りの紙数を埋めることにしましょう。「遠足事件」といっても、幼稚園の遠足の途上で何か事件が起きた

というのではなくて、何と僕が勝手に女の子を二人だか三人だかつて遠足に出かけてしまったという事件なのです。もちろん授業中にですから考えて見れば飛んでもない話です。とにかく小春日和の午前中だったと思いますが、ときどき先生に引率されて知っていた、湯島聖堂よりの正門から三四人づれでフラフラと電車道へ出てしまったのです。多分松任町からぢやなかったかと思うのですが、市内電車に意気ヨウヨウと乗り込みました。車内はすいていたのでしよう、窓につかまって外を眺め、何やらはしゃいでいたのを憶えています。そのうち車掌が「切符まだだったね」とかいいながらやって来ました。こちらは一文なしにきまっています。次の停留場でアッサリ放り出されてしまいました。そこが須田町辺だったのではないかと思えます。女の子たちがコワイコワイといひ出したのに僕は妙に気が大きくなり、一人でチットモコワクナンカナイヨと言ひ張りました。大冒険に酔ったような気になり始めたのでしよう。実に危い話ですね。そして、またもや懲りもせず、別の方向の電車に乗り込みました。今度はいよいよ長く乗った様な気がします。しかし

また無賃乗車を発見され、引ずりおろされました。それがどこだったか、日本橋辺か駿河台辺か今となっては皆目見当はつきませんが、とにかく賑やかな所でした。今度はさすがのドン・ファンのお卵もいくらか心細くなつたと見えて、歩道を来る人を片端いから通せんぼして、我等一行の上に襲いかかった災厄を大童で説明し始めましたが、誰一人とりあつてくれません。いささか自分の運命をもて余しはじめました。その時何という幸運でしょう。若い眼鏡をかけた一人の紳士が事の仔細を訊いてくれ、やがてみんなを電車で母校へ送り届けてくれたのです。この恩人たる紳士が何処の誰であるのか全くわからないのですが、やはり教育者にちがいないと思っています。所で、僕たちは多分一、二時間にわたる大遠足を無事に済ませて恐らく平気な顔して大手を振って園に帰りましたのですが、少くともその時は先生からは何も訊かれなかつたし、一言のお目玉もちょうだいしないでいつもの通りの時間に書生に附添われて家へ帰りました。それでこの事件も実は僕の記憶からほとんど薄れかけていたのです。

所が、つい昨年の事です。三十年振りでお

目にかかるなり及川先生から「あなたあの時の事憶えていますか」と前置きされて話されたその内容は、およそ次のようなものでした。まず、僕たち三人か四人の失せ方が発見されて、当然の事ながら先生方は大へんな心配をなさった。——（今更ながら申し訳ないことです）——しかし幸なことにそれから間もなく僕たちは連れもどされた。つまり先生方に御心配をかけた時間は割に短かくて済んだらしい。ああ、せめてもの事です。——そして、これはとくに感にたえないことです。僕たちが発見されても、その行動を深く追究せず、けつして叱らないというお積りを先生方の間で決められたということでした。その後の適当な時期に改めて言い聞かせたものがあるいは僕たちに気づかぬようにして監視を厳重にされたものか、とにかくこういうトテツもない行動を取行した子供を預けられた先生方のその後の御心労は並大抵ぢやなかったろうとお察しますが、何れにしても僕たちは当然受けるべき叱責も罰も受けることなしに、幼稚園生活をただだまっすぐに楽しいものにする事ができたのでした。まことにありがたいことだと思っております。

（お茶の水女子大講師）

## — 待望の書 — 「心の花束」 副島ハマ先生著

「あなたは生れた瞬間におぎあ保育」と泣いたんぢやない？」と友人に云われる程私は保育々々と云い暮して参りました。

私の過去の思い出は、すべて保母であつたことの喜びにつながり、そしてそれは、ささやかな私の歴史の残る余白をも、この保育という仕事で貰きたいという気持を抱かせてくれるのです。私の明け暮れ念願していることは、現在の職場において不束な私が、どうすればわが国保育行政の、稔れた礎になり得るか、どうすれば全国の保母先生方の、御成長への踏み台になり得るかと云うことです。

保育事業に最も重要なものは何かと申しますと、「人」即ち、保母という職責を守つて居られる方々の個々の人格です。世の中のものすべて、初きのあるところ、人格の必要とせざるものはないでありましようが、保育事業程、まごころといつくしみに溢れた人格を、きびしい要求するものはないでありましよう。この貧しい本は、そういうきびしい要求に対して、皆さまの美しい志の枯れることがないようにとの願いから、皆さまに贈る御手紙です。花束です………」

これは心の花束のはしがきから抜萃した文章である。

副島ハマ先生は、厚生省児童局保育課に勤務し、全国の保育の指導に當つて居られる事務官で、皆さまにはなじみが深いことと思ひます。

内容の一章は「保育事業への自負と責任について」、「生き生ききびきび」、「新しく職場につく友に」など保母の職場倫理を、二章では「はりきり所長」、「婦人会の結晶」、「八尾保育所」、「生きている良寛和尚」など、あちこちの保育所長を紹介し、読む人を大いに啓蒙させる、保母も所長も共に必読されるようお勧めする。

そして今日の保育界に広く読まれ、副島先生の謂ゆる「児童福祉の立場からの保育に徹底し、その精神が家庭や地域にまで浸透しき行き、私たちの民族的志願を子供たちによって完うされるよう………」に期待します。

発行日 昭和二十八年十二月一日 定価 一八〇円

○なお保母先生に限り送料共一六〇円で頒布致します。

発行所 東京都千代田区霞ヶ関二の一（厚生省児童局内）

財団法人 日本少年教護協会